みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

1.3　博学連携教員研修ワークショップ10年のあゆみ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 京子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008304

上羽・中牧・中山・藤原・森茂編『調査報告　学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』
国立民族学博物館調査報告　138:37-46(2016)

1.3　博学連携教員研修ワークショップ10年のあゆみ

中山　京子
（帝京大学）

要旨：博学連携教員研修ワークショップ10年の取り組みについて，ファシリテーター，ワークショップの類型，10年継続による成長，知財の観点から，考察を行う。10年を経過することによって進歩と課題の双方が浮かび上がる。進歩と課題は，関わってきた個人レベルにも組織レベルにも言えることであるが，ここでは博物館一般ではなく国立民族学博物館という場で行われるワークショップであり，国際理解教育という特色をもつ教員研修の場であることなどから，通常の博物館ワークショップの進歩と課題とは異なる省察が必要である。それゆえ10年という長期の取り組みについて論考する。

キーワード：ファシリテーター，ワークショップ類型，成長，知財

1　ワークショップとは何か

「博学連携教員研修ワークショップ」とはそもそも何か。「博物館と学校（教育）が連携して行う教員研修のためのワークショップ」ということになる。しかし，このワークショップという語があちこちでかなり無造作に使用されている印象がある。教員研修の現場では，体験的な活動をしさえすれば「ワークショップ」と呼ぶような実態を見ることもある。

ワークショップについて，中野民夫（2001）は，「これまでのパラダイムの転換を迫られているわたしたちの社会の行き詰まりを打開する，ひとつの希望の道」であり，「現代課題である持続可能な社会をつくる」としている。また，中西紹一ら（2006）は，「参加者の世界を捉えるまなざしを革新・再構成する契機を与えるアクティビティ」と述べる。堀公俊・加藤彰（2008）は，「主体的に参加したメンバーが協働体験を通じて創造と学習を生み出す場。音楽で言えばジャズ。参加したメンバーは当事者意識を持ちながらワークショップを一緒になってつくりあげる。各人が智恵や個性をぶつけ合いながら，その場その時だけの音楽を協同で生み出す。その過程を通じてチームもメンバーも学習し，成長する」と説明する。

佐藤優香は，「ミュージアムにおける教員研修ワークショップの可能性――国際理解教育における博物館の活用――」の中で，国際理解教育において博物館を活用したワークショップ型研修は有効であること，参加者が主体的に関わりプロセスの体験に価値を置いて少人数グループで共同するという形態が国際理解教育を体感するのに適していること，民博を利用することは文化的多様性に直面することに他ならないことなどをあげている（佐藤 2015：57）。

博学連携教員研修ワークショップでは，「国立民族学博物館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して，国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考える」（中山 2007：115）ことが主旨として掲げられてきた。国際理解教育にかかわる教育領域に関心を持つ人々が民博に集い，主に教員に対して研究と修養の場を提供し，ワークショップを行って来た。以降に述べるが，実に多様なワークショップが開催され，多くの人々が関わり成果をあげてきたが，博学連携の意義や可能性そのものについての省察は十分ではなかった。そこで，ファシリテーター，ワークショップの類型，10年継続したことによる成長，知財の観点から，考察を行いたい。

2　ワークショップを担当するファシリテーター

本職は「教師」「研究者」である人々が，ワークショップでは「ファシリテーター」となる。ファシリテイト（Facilitate）とは，「容易にする」「促進する」「手助けする」「手伝う」ことを意味し，ファシリテーターとはそれを担う人を意味する。堀・加藤（2008）は，ワークショップにおけるファシリテーターとは「活動に寄り添いながら，大きな成果や学習が生まれるよう促進や支援をする」と示している。

従来の博学連携の課題として，博物館関係者と学校教育関係者の感覚の差異をあげることができる。博物館教育関係者は，「教師は教えたがる。発見や展示との対話をもっと大事に」と考え，学校教育関係者は，「学習目標がはっきりしない。博物館ならではの効果的な指導をしたい」と考える傾向が強い。この差異については，博学連携の研究活動に携わる中で筆者自身も感じたことは事実であるし，他の人が口にするのも度々耳にした。

そこで，博学連携ワークショップを展開する中で，「教えることが大好き」な教師たちに「ワークショップ」ができるのか，もしくは学校教育活動に具体的に結びつく支援が博物館関係者にできるのか，という懸念が生じる。

教師には，講師主体の学習構造ではなく受講者主体の学びを意識してもらう必要があり，博物館関係者には，学校教育や教師を具体的に支援することへの意識を高めてもらうことが必要である。民博という空間は，国際理解・異文化理解という視点に共通項があり，協働によって双方をつなぐことができる場である。

民博でのこの博学連携教員ワークショップでファシリテーターになる人は，国際理解教育の専門家であり，その中でも専門領域は学校教育だけではなく，開発教育や幼児教育，ドラマ教育の専門家が含まれる。学校教育に従事する場合にも，専門教科は社会科（地理歴史科・公民科），音楽科，図画工作科，技術科とそれぞれである。教員の場合は，自身も学校教育の場を離れてのびのびと新たな知見を広げ，実はファシリテーターを務めることも研修となっている。

参加者側（教員や指導者）の側から考えてみよう。ワークショップを導く人が，ファシリテーターよりも教師色の強い（＝教授的な進行や雰囲気）が強い場合，教員研修として「教わる」ことを求めてきた参加者にとっては，ここちよさと参加した安心感が感じられる。一方で，ワークショップなのだから，と自由度が高い環境で探求したい参加者にとっては，不満が生じる。ワークショップを導く人が，教師色よりもファシリテーターの支援する行為を主とした場合，博物館という場で自由に探求したい参加者はここちよさや開放感をもつことができるが，研修として知識や技能を求めている参加者は，享受する学習・提供される知識が少ないことへの不満が生じる。

ファシリテーターの側にも葛藤がある。教員研修だから明日すぐ役立つノウハウやモデルを提供すべきであるという考えと，博物館だからこそ明日の指導にすぐ役立つとは限らないような広い視野や考え方を提供し，学校教育の世界から教師を解放し，知の刺激を感じてもらうべきだという考え方が存在する。

3　ワークショップの類型

民博で行う博学連携教員研修ワークショップは，このバランスの中で，それぞれのワークショップが特性を持ちながら展開されてきた。堀・加藤（2008）によると，ワークショップには三つのタイプがあるとされる。一つ目は，「教育学習型」で教育・学習・成長を目的としている。二つ目は，「合意形成型」で，社会的課題について考えることを目的としている。三つ目は「問題解決型」で，組織の問題解決や発展を目的としている。民博でおこなっている博学連携教員研修ワークショップは，一つ目と二つ目の混合，変革型であり，「民博でしかできないワークショップ」として，ファシリテーターの専門性にもとづき，民博の資源（展示，収蔵物，研究者）と，学校教育（教師，教材）がむすびついて生まれる体験学習型のワークショップであると言えよう。

中野民夫（2001），堀・加藤（2008）らがワークショップのカテゴリーを類型化している。それによると，①アート系，②まちづくり系，③社会変革系，④自然・環境系，⑤教育・学習系，⑥精神世界系，⑦統合系，⑧表現系の八つに整理することができる。この類型を参考にしながら，この博学連携教員研修ワークショップを類型化すると，①ものつくり系，②ITC系，③開発教育系，④教育・学習系，⑤表現系，⑥言語系，⑦モノ系に整理することができる。

以下にワークショップを分類してみよう。

①ものづくり系：仮面をつくって語って異文化理解，砂絵（点描画）でシンボリズム，100円ショップでネイティブ・アメリカン，パンダナス物語，「割り箸」で地図を作ろう ──マーシャル諸島の海図作りを体験──，オセアニアかるたをつくろう，北西海岸先住民の木箱づくり，アフリカ・アカン系民族「砂金秤の分銅」づ

くり，自分の希望を叶えるエケコ人形，「すごろく教材」で異文化理解

②ITC系：ケータイで「みんぱく異文化発見カルタ」づくり，民博のデジタル・コンテンツを利用した授業づくり，ものづくりとiPadを用いた現地学習

③開発教育系：みんぱくでパーム油と出会ったら！？，みんぱくで考えようESDカリキュラム，私にとってのESD，先住民とわたし，ひとかけらのチョコレートから，コーヒーモノガタリ──みんぱく篇──，「フェアトレード」ってなあに？，一粒のカカオ豆から

④教育・学習系：博物館を使った授業づくり──マイ・カリキュラムを編もう──，明日からできる博学連携──『みんぱっく』を使ったカリキュラムのアイデアを出し合おう──，「みんぱっく」を使ったカリキュラム開発，学芸員になる！世界子ども環境ポスター展づくり

⑤表現系：なりきりフォルクローレ，身近な素材から音が生まれる時──竹でつながる太平洋の島々──，「思いを込めた音」って何だろう？歌と踊りで語りつぐ南の島の物語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，民博シアター：展示から劇活動へ，みんぱくシアター：展示の登場人物になってみよう！／「多みんぞくニホン」を体感する

⑥言語系：くさび形文字で自分の名前を書こう，ことばの不思議・魅力，ことばで「世界」をみてみよう，「ことばへの目覚め」のための教材開発，ことばと文化への目覚め

⑦モノ系：モノからひらめくモノコード，to私from私──標本資料のふるさとからの便り──，裏側みせます──「じゅうたんをつくろう！」を通して，「見方」を開発──インドの染織資料が見えてくる，さわっておどろく「手学問のすゝめ」，織機のカラクリ大発見，「みんぱっく」で世界と教室をつなごう！，モノとの対話：何が聞こえる？何が見える？

このように10年のワークショップを類型化してみると，バランスよく企画が実現していたことがわかる。

4　ワークショップ継続による成長

この博学連携教員研修ワークショップでは，10年続けた分，参加者，ファシリテーター，組織の成長の様子が見られている。参加者に関して言えば，例えばある参加者は，最初に参加したのは大学3年生で教職課程を履修していたが，卒業して教師になっても継続して参加し，時には同僚の教師を誘って参加していた。ワークショップで学んだことを，自分の教室での実践にとりこみ，子どもたちと学習活動を展開している事例が報告されている。また別の中堅教員は，複数年にわたって様々なワークショップに参加し，ワークショップで学んだことを地域の国際理解教育の研究会で報告をしたり，実践にとりこ

んだりしていることを報告している。

ファシリテーターも成長をした。専門とする教科教育学とは異なる「博学連携」という視点から教材研究をしたり実践を行ったりして視野を広げるとともに，ワークショップを担当する中で，「教師」とは異なる立場でその場をマネジメントする力を求められた。観察していると，比較的通常の「教師」の姿を崩さずに授業を展開するようにワークショップを進めるケース，授業をなぞらえる形で模擬授業のように実践報告をするケース，教師という雰囲気はまったく見せずにコーディネーターとして振舞うケースなどが見られた。それは「ワークショップ」へのイメージの差異，「教員研修」というイメージの強弱に左右されていると思われる。いずれにしても，学校教育現場を離れた博物館という場での活動を繰り返すことで，ファシリテーターとしてのあり方を模索し，教育活動への新しいスキルを身につけたのではないかと思われる。

民博を舞台に博学連携に関わる組織も成長をみせた。まずは森茂岳雄を代表とする民博での共同研究が立ち上がり，文化資源プロジェクトとして継続した。共同研究員のほとんどが所属する日本国際理解教育学会との連携がすすみ，民博と学会が協定をむすび，日本国際理解教育学会では民博との博学連携活動を事業として位置付け，会員の研鑽の場としてきた。民博の研究者と学会会員の交流だけでなく，みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）とも交流が始まった。ワークショップ担当者も入れ替わりながら新しい挑戦を続け，ワークショップ参加者がファシリテーターとして参加するようになるなど，組織も成長を続けてきた。

組織だけでなく，教員研修としての１日の構成自体も成長をした。企画をする段階では，１日の運営や内容の構成について時間を割いて議論をした。教員研修として充実したコンテンツは何か，必要なもの・不要なものは何か，各ワークショップの振り返りをどのように共有することができるか，参加者の特性や日本国際理解教育学会との共催としての良さは何か，などの検討を重ねた。当初，ワークショップの振り返りは各ワークショップごとに行っていたが，他のワークショップの様子も知りたいというアンケートに記載された声を活かしてことばによる全体での共有や講評を行うようにした。さらに具体的にイメージを持つことができるように映像での振り返りと講評が行われ，さらに「カフェ懇談会」の実施へと展開した。「カフェ懇談会」とは，少しの飲み物と菓子とともに，カフェのような気楽さでファシリテーターと参加者が交流を深め，ネットワークづくりと実践につながるステップとして設定された。

5　ワークショップにおける知財

ワークショップに参加する人は，何を期待してやってくるのだろうか。知り合う人脈，手法，知識，配布物，技術，作品といった具体的なものから，ワークショップで刺激を

受けること，日常とは離れた空間に身を置く心地よさ，参加をするという行為への自己充足感など感覚的なものまで，いくつかの要素が考えられる。

近年，ワークショップが多方面で盛んになる中で，ワークショップの知財（intellectual property）について注目されるようになってきた。先に述べたように，ワークショップは「主体的に参加したメンバーが協働体験を通じて創造と学習を生み出す場」であるとすると，そこで生成された知恵，手法，技術は誰のものなのだろうか。ファシリテーターはその活動の素材や元になる知識や手法を提供するが，加えて参加者からも提供される。ワークショップ知財研究会編（2007）は『こどものためのワークショップ――その知財はだれのもの？――』において，ワークショップと知財の関係について，軽視しないように注意を喚起している。では，民博におけるこの博学連携教員研修ワークショップにおける知財については，どのように捉えたらよいだろうか。「知財権」（intellectual property right）という考え方がある。博学連携教員研修ワークショップでは，知財権といったことは議論されたことはないが，ワークショップでは，民博の収蔵品や研究者の知識が持ち込まれる。また教員の教材化への手法も提供される。ワークショップで提供され，また，ワークショップで生成されたものは，ファシリテーターのものなのか，参加者のものなのか，民博のものか，学会のものなのか。「教育」という基本的に善意の社会行為が前提になっていること，普及への暗黙の期待があること，このワークショップへは参加費が無料であることなどから，この視点は論議されなかったが，連携する組織と参加者が複雑化するほど，本来は知財に関する共通理解や議論が必要であろう。

文　献

佐藤優香
2015 「ミュージアムにおける教員研修ワークショップの可能性――国際理解教育における博物館の活用」『国際理解教育』vol.21。
中西紹一・松田朋春・紫牟田伸子・宮脇靖典
2006 『ワークショップ　偶然をデザインする技術』東京：宣伝会議。
中野民夫
2001 『ワークショップ――新しい学びと創造の場』東京：岩波書店。
中山京子
2007 「国際理解教育における博物館活用の可能性（2）――第二回国立民族学博物館を活用したワークショップ型教員研修の試み」『国際理解教育』vol.13。
堀公俊・加藤彰
2008 『ワークショップ・デザイン』東京：日本経済新聞出版。
ワークショップ知財研究会編
2007 『こどものためのワークショップ――その知財はだれのもの？』東京：アム・プロモーション。

〈資料1〉10年間のワークショップタイトル

2005年教員研修ワークショップ「博物館を活用した国際理解教育」
2006～2008年 「博物館を活用した国際理解教育」
2009年 「学校と博物館でつくる国際理解教育――新しい学びをデザインする――」
2010年 「学校と博物館でつくる国際理解教育――民博展示を活用する――」
2011年 「学校と博物館でつくる国際理解教育――新しい民博展示を活用する――」
2012年 「学校と博物館でつくる国際理解教育――新しい学びをデザインする――」
2013年 「学校と博物館でつくる国際理解教育
――センセイもつくる・あそぶ・おどる・たのしむ――」
2014年 「学校と博物館でつくる国際理解教育――センセイもつくる・あそぶ・たのしむ――」

〈資料2〉10年の基調講演タイトル

2005年 「国際理解教育における博学連携の意義と可能性」（森茂岳雄）
2006年 「国際理解教育の学びを『ひろげる』『つなげる』――博学連携の意義と可能性――」
（森茂岳雄）
2007年 「物が育てる異文化リテラシー――はじまりはいつも遊びから――」（高橋順一）
2008年 「国際理解教育とフィールドワーク――モノに出会う，人に出会う」（大津和子）
2009年 「素材から教材へ――開発教育と民博――」（藤原孝章）
2010年 「世界遺産教育と博物館の活用」（田渕五十生）
2011年 「博物館と歴史の授業――新学習指導要領に盛り込まれた博物館の活用――」（田尻信壹）
2012年 「博学連携による博物館の活用」（中牧弘允）
2013年 「博学連携教員研修ワークショップ8年のあゆみ――センセイもたのしむ――」
（中山京子）
2014年 「文化人類学と学校現場をつなぐ――みんぱくの教育活動をふりかえって――」
（森茂岳雄）

〈資料3〉10年のミュージアムツアー

民博の教員によるミュージアムツアー（2006，2007年はギャラリートーク）
2006年：仮面ギャラリートーク（中牧弘允・林勲男・吉田憲司）
2007年：ギャラリートーク（朝倉敏夫・杉本良男・三島禎子）
2008年：岸上伸啓，佐々木利和，八杉佳穂
2009年：アフリカ展示，西アジア展示（竹沢尚一郎・川口幸也・上羽陽子）
2010年：西アジア，音楽，言語（上羽陽子・笹原亮二・八杉佳穂・菊澤律子）
2011年：オセアニア，アメリカ（丹羽典生・八杉佳穂・中牧弘允・伊藤敦規）
2012年：ヨーロッパ展示，探究ひろば（森明子・庄司博史・野林厚志・広瀬浩二郎）
2013年：日本の文化展示（笹原亮二）
企画展「アマゾンの生き物文化」（中牧弘允）
企画展「武器をアートに――モザンビークにおける平和構築」（吉田憲司）
2014年：朝鮮半島の文化，中国地域の文化（朝倉敏夫・横山廣子）
日本の文化「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」（呉屋淳子・菅瀬晶子）

〈資料 4〉10年のワークショップタイトル

2005年教員研修ワークショップ「博物館を活用した国際理解教育」

小学校ワーキンググループ　進行：中山京子

キーワード：お面づくり，みんぱっく，砂絵

中学校ワーキンググループ　進行：今田晃一

キーワード：ものの広場，ものつくり，レインツリー，文化祭

高等学校ワーキンググループ　進行：田尻信壹

キーワード：モノから見た世界史，レポート作り，砂糖プランテーションと奴隷

博学連携教員研修ワークショップ2006「博物館を活用した国際理解教育」

①みんぱくでパーム油と出会ったら！？（藤原孝章・八杉佳穂）

②なりきりフォルクローレ（居城勝彦・山本紀夫）

③仮面をつくってかたって国際理解（八代健志・秋山明之・吉田憲司）

④ケータイで「みんぱく異文化発見カルタ」づくり（田尻信壹・柴田元・中牧弘允）

⑤砂絵（点描画）でシンボリズム（中山京子・松山利夫）

⑥カリキュラム開発・マイ・アイデア（今田晃一・木村慶太・佐藤優香・林勲男）

博学連携教員研修ワークショップ2007 「博物館を活用した国際理解教育」 2日間開催

①みんぱくで考えようESDカリキュラム（藤原孝章・上田信行・三島禎子）

②明日からできる博学連携──『みんぱっく』を使ったカリキュラムのアイデアを出し合おう──（今田晃一・木村慶太・杉本良男）

③くさび形文字で自分の名前を書こう（森若葉・八杉佳穂・青柳千子）

④100円ショップでネイティブ・アメリカン（高橋順一・岩本貴永）

⑤パンダナス物語（織田雪江・中山京子・森茂岳雄・ピーター・マシウス）

⑥身近な素材から音が生まれる時──竹でつながる太平洋の島々──（居城勝彦・八代健志・寺田吉孝）

⑦「割り箸」で地図を作ろう──マーシャル諸島の海図作りを体験──（田尻信壹・山本泰則）

⑧ケータイでオセアニアかるたつくり（柴田元・林勲男）

博学連携教員研修ワークショップ2008 in みんぱく「博物館を活用した国際理解教育」

①私にとってのESD（藤原孝章・上田信行・南真木人）

②身近な素材から音が生まれる時（居城勝彦・八代健志・福岡正太）

③ひとかけらのチョコレートから（織田雪江・八杉佳穂）

④先住民とわたし（中山京子・森茂岳雄・岸上伸啓・佐々木利和）

⑤「みんぱっく」を使ったカリキュラム開発（今田晃一・木村慶太・日比野功・山田幸生・佐藤優香・林勲男）

博学連携教員研修ワークショップ2009 in みんぱく

「学校と博物館でつくる国際理解教育──新しい学びをデザインする──」

①北西海岸先住民の木箱づくり（木村慶太・山田幸生・岸上伸啓・宇治谷恵）

②仮面をつくって語って異文化理解（秋山明之・笹原亮二・五月女賢司）

③モノからひらめくモノコード（居城勝彦・八代健志・寺田吉孝）

④ひとかけらのチョコレートから（織田雪江・八杉佳穂・鈴木紀）

⑤to 私 from 私──標本資料のふるさとからの便り──（田尻信壹・上羽陽子）

博学連携教員研修ワークショップ2010 in みんぱく
「学校と博物館でつくる国際理解教育──民博展示を活用する──」
①民博のデジタル・コンテンツを利用した授業づくり
（今田晃一・日比野功・長田朋之・林勲男）
②仮面をつくって語って異文化理解（秋山明之・笹原亮二・五月女賢司）
③「思いを込めた音」って何だろう？（居城勝彦・八代健志）
④ことばの不思議・魅力（中山京子・八杉佳穂・菊澤律子）
⑤裏側みせます──「じゅうたんをつくろう！」を通して
（チームじゅうたん（MMP）・上羽陽子）
⑥コーヒーモノガタリ──みんぱく篇──（織田雪江・西尾哲夫）
⑦アフリカ・アカン系民族「砂金秤の分銅」づくり
（木村慶太・山田幸生・吉田誠・川口幸也）
博学連携教員研修ワークショップ2011 in みんぱく
「学校と博物館でつくる国際理解教育──新しい民博展示を活用する──」
①民博のデジタル・コンテンツを利用した授業づくり
（今田晃一・宇治谷恵・長田朋之・宇田川妙子）
②仮面をつくって語って異文化理解（秋山明之・笹原亮二・関根理恵）
③歌と踊りで語りつぐ南の島の物語（居城勝彦・八代健志・中山京子・丹羽典生）
④自分の希望を叶えるエケコ人形（木村慶太・山田幸生・中牧弘允）
⑤ことばで「世界」を見てみよう（織田雪江・庄司博史）
⑥「見方」を開発──インドの染織資料が見えてくる（上羽陽子・佐藤優香）
博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんぱく
「学校と博物館でつくる国際理解教育──新しい学びをデザインする──」
①仮面をつくって語って異文化理解（秋山明之・笹原亮二・呉屋淳子）
②歌と踊りで語りつぐ南の島の物語Ⅱ（居城勝彦・八代健志・中山京子・林勲男）
③さわっておどろく「手学問のすゝめ」（広瀬浩二郎・五月女賢司）
④民博シアター：展示から劇活動へ
（小林由利子・山本直樹・黒岩啓子・森茂岳雄・菅瀬晶子）
⑤「すごろく教材」で異文化理解（東峰宏紀・宇治谷恵・朝倉敏夫）
⑥織機のカラクリ大発見（木村慶太・山田幸生・吉田誠・MMP・上羽陽子）
⑦学芸員になる！世界子ども環境ポスター展づくり（佐藤優香・久保正敏）
博学連携教員研修ワークショップ2013 in みんぱく
「学校と博物館でつくる 国際理解教育──センセイもつくる・あそぶ・おどる・たのしむ──」
①みんぱくシアター：展示の登場人物になってみよう！
（小林由利子・山本直樹・森茂岳雄・菅瀬晶子）
②「フェアトレード」ってなぁに？（織田雪江・鈴木紀）
③「みんぱっく」で世界と教室をつなごう！（呉屋淳子・東真理子）
④「ことばへの目覚め」のための教材開発（吉村雅仁・岩坂泰子・中牧弘允・菊澤律子）
⑤ものづくりとiPadを用いた現地学習（今田晃一・木村慶太・山田幸生・齋藤玲子）
⑥すごろく教材で異文化理解（東峰宏紀・宇治谷恵・韓敏・朝倉敏夫）
⑦歌と踊りで語りつぐ南の島の物語Ⅲ
（居城勝彦・八代健志・中山京子・ピーター・マシウス）

博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく

「学校と博物館でつくる国際理解教育――センセイもつくる・あそぶ・たのしむ――」

①みんぱくシアター：「多みんぞくニホン」を体感する

（小林由利子・森茂岳雄・山本直樹・菅瀬晶子・上羽陽子）

②一粒のカカオ豆から（織田雪江・鈴木紀）

③「みんぱっく」で世界と教室をつなごう！（八代健志・横山佐紀・呉屋淳子）

④ことばと文化への目覚め（吉村雅仁・岩坂泰子・中牧弘允・八杉佳穂）

⑤「すごろく教材」で異文化理解（東峰宏紀・横山廣子・朝倉敏夫）

⑥モノとの対話――何が聞こえる？何が見える？

（黒岩啓子・秋山明之・古川岳志・吉田憲司）